

## 館林市のハウス栽培の歴史

どうしてハウス栽培が始まったのか？

(立地条件 野菜栽培に適しているためのいくつかのポイント)

館林市は群馬県の東南端に位置し、関東地区全体からみるとほぼ中央にあたり、利根川、渡良瀬川に挟まれ、水の豊富で肥沃な優良農地を数多く残す平坦な土地です。土質は典型的な関東ローム層による火山灰土です。それを細かく分析をすると、市内の南部にあたる、赤羽、六郷、三野谷の一部は表土が赤っぽい軽質の土壌で、ハウス栽培が始まる前は、カボチャ、白菜などの野菜が作られていたようです。北部の郷谷、渡瀬、大島、多々良地区では、黒っぽい表土の粘土質土壌で、水稻やナスが作られていたようです。

気候は、内陸特有の温暖な気候であり、年間平均気温14℃、降水量1,175mm、12月～2月は、5℃以下の低温が続き、この期間は50mm以下の小雨で晴天日が多い。特に1～2月の日照量は、日本一長いとされています。また、台風や雪害といった大きな自然災害が少ないのも特徴です。土地、水、冬の日照量に恵まれた館林市は、野菜を作るのにとても良い条件を備えているといえます。特にキュウリは、昭和40年前半にビニールハウスの普及と共に急速に発展をしました。キュウリは作物の中でも最も、水と光を好む野菜であり、種を播いてから収穫するまで約2ヶ月と、生育スピードが早く、収益をあげるのに適していました。その分、キュウリ栽培はとても忙しく、収穫が始まったら一日も休んでいる時間がありません。それは昔も今も変わらないようです。その頃各地では、同じ野菜を作る仲間が集まり、農事研究会、ハウス組合などができ、勉強会や出荷作業などが行われました。主な出荷先は京浜市場でした。

ハウス栽培が始まった最初の頃のエピソードで、米1haの売り上げと、キュウリ30坪の売り上げが同じくらいであったと聞きました。面積からみると100分の1です。

昭和50年の半ばに館林農協にほぼ全員の栽培者が出荷することになり、平成11年度の野菜の年間販売高は約75億円、内キュウリは37億円で約49%を占め、15,000トンの出荷がされています。他にナス、トマト、イチゴ、白菜など約25品目で年間の出荷運営がされてい

ます。

館林より前にハウス栽培でキュウリが作られた産地は、ほぼ全国的に同じ年代であったようですが、当時、ハウス栽培が最も盛んな産地は隣の埼玉県と、静岡県であったようです。

埼玉県は館林市に隣接しているので気候、土地、流通等、同じ形態であったようです。

静岡県は、より温暖な気候、日本で最も野菜や果樹の生産が多く、大阪方面への出荷も数多くあったようです。

ハウス栽培初期の40年代前半は、暖房機の普及がまだ完全ではなかったため、今の5分の1位の収穫であったようです。50年代半ばから、ハウス様式、施設管理、品種の育成などが進み、年間約300坪で20トンの収穫が出来るようになりました。